

地域子育て支援拠点事業における「見守り型」活動の役割について

Consideration for “mimamori-gata” Activity in the Regional Raise Parenting Support

石井 栄子

ISHII, Eiko

地域における子育て支援活動は、既にひろば等活動を通じて住民の間で周知されている。そのニーズは大きく、現在では、子育て支援拠点事業として、国はひろば型、センター型、児童館型と分類し、活動を自治体に義務化している。活動スタイルはさまざまではあるが、プログラム型、ノンプログラム型等に大別される。筆者は、実際にノンプログラム型に位置する「見守り型」の子育て支援活動を展開し、併せて支援者の研修を実施している。そのうえで常に、地域における子育て支援活動の重要性と必要性を痛感している。特に重視すべき点として、「見守り型」活動における『見守り』という活動視点があると考えている。「見守り型」活動の『見守り』視点は、多くの拠点活動の中でも漠然としているのが現状であり、活動そのものを曖昧なものとしている。そこで、本論文においては、活動事例に対する「見守り型」活動に関する評価を通して、拠点型子育て支援活動における「見守り型」活動の活動方法について述べようと思う。

I. はじめに (序)

地域における子育て支援活動は、既にひろば等活動を通じて住民の間で周知されている。そのニーズは大きく、現在では、子育て支援拠点事業として、国はひろば型、センター型、児童館型と分類し、その活動は自治体に義務化されている。

筆者は、児童館と協働で、「みどりのへや」という子育て支援活動を展開している。「みどりのへや」の出典は、フランスのフランソワーズ・ドルトの「緑の家」(la maison verte) であり、これをモデルに実施された

専門職による支援活動である。その方法と効果は、すでに、子ども未来財団の2005年度児童関連サービス調査研究等事業報告¹に公表してある。ここでは、子育て支援活動の役割を提示している。また、それを元に、2006年度では、地域子育て支援活動者養成テキスト²を作成し、これを用い、実際に、地域子育て支援活動者に対して、研修を実施している。

更に、2007年は、「みどりのへや」活動を継続しながら、他のひろば事業の現状調査に参加し、その結果を地域における子育て支援サービスの有効活動に関する研究の一部として、子育てひろばにおける支援のあり方につ

キーワード：子育て支援、「見守り型」活動、「見守り型」活動の活動視点、活動指標

Key words：Parenting Support, “mimamori-gata” activity, point of “mimamori-gata” activity, activity indicator

いてまとめている³。

これらの活動を継続し、併せて支援者の研修を実施するなかで、筆者は地域における子育て支援活動の重要性と必要性を痛感している。そのうえで、特に重視すべき点として、「見守り型」活動における『見守り』という活動視点を挙げたい。

子育て支援活動にはさまざまなスタイルがある。一般的には、企画を催し、それを中心に支援活動を展開するプログラム型、特別の企画を用意せず、親子の居場所作りを中心に考えたノンプログラム型に大別される。本論文においては、ノンプログラム型の中でも、参加する親子の参加場所での様子を総合的に見守り、支援の必要なときに、必要な支援を行なう活動を、「見守り型」の子育て支援活動と位置付け、「見守り型」活動を同義とする。

また『見守り』を広辞苑で引くと、①見て番をする。事が起こらないように注意して見る。②じっと見つめる、熟視する。とあるが、ここでは①が相当することを追記しておく。

「見守り型」活動の『見守り』視点は、多くの拠点活動の中で、漠然としているのが現状であり、活動そのものを曖昧なものとしているという実感を持っている。子育て支援の活動者の中には、その役割りについての認識が薄く、「見守り型」の支援を考えながらも、いつしか企画やイベント中心の子育て支援に止まったり、そちらの活動に偏っていったりしている。そこで、本論文においては、活動事例に対する「見守り型」活動に関する評価を通して、拠点型子育て支援活動における「見守り型」の活動方法について述べてみる。

Ⅱ. 「みどりのへや」活動

「みどりのへや」活動は、フランスの精神

科医フランソワーズ・ドルトによりパリ市で創設された「緑の家」の活動をモデルとして、日本の子育て支援の場に適応させた「見守り型」の子育て支援活動である。はじめに、ドルトの「緑の家」活動と日本において筆者が行っている「みどりのへや」活動の内容を提示しておく。

1. ドルトの「みどりの家」⁴

役割と理念：ドルトは「緑の家」を託児所や保育園、幼稚園に行く準備をする場として、治療の場ではなく、予防の場として位置付けている。この予防は問題が起きないようにする予防ではなく、これから家庭の外の社会に出て行こうとする親子に心の準備をしてもらい、移行に備えることを意図している。また、すでに社会に踏み出して傷ついた親子の傷が大きくなるように修復し、将来に影響を与えるころの障害を早期に予防して、社会へ再復帰するための橋渡しをするという二次予防的役割りも演じている。

活動の目的は2つに大別されており、①親の孤立感を解消する。②子どもの家庭生活から社会生活への移行を助ける。となっている。

活動方法：実際の活動方法について述べる、「緑の家」は「幼い子どもとその親のための出会いとゆとりの場」として開かれており、①親子同席の義務、②来訪者は匿名の権利、③活動者における専門性の確保が掲げられている。①では「緑の家」が親子の支援の場であり、子どものみを預かる場ではないとして、親子単位が重視されている。②では、親子の主体性と個としての安全性が守られている。③では、活動者は必ず3名は配置し、1人は男性、1人は精神分析家（しかし治療は行わない）であることが義務付けられている。主な

役割りは、親子間、子ども同士、親同士のコミュニケーションを促進させることである。活動の背景にはドルトの精神分析家としての思想がしっかりと確立され、意識されている。活動上での着目点は、子どもを一人格として認めたいという親子単位へのかかわりが行われている点、愛着関係の確立から子離れまでを、親子の自立を促しながら支援している点、特に、言語化に重きがおかれている点であろう。

2. 本研究のフィールドとなる「みどりのへや」活動

機能と役割り⁵：実際に活動の試行を通して、以下のように提示している。

- (1) 来室した親子と遊びの場面を通じて関わり、親の自尊感情を高め、子育て力を引き出すために、①孤立感の払拭、②初めての経験への誘導、③異年齢児とのかかわりの促進、④気がかりなことへの対応
- (2) 場としての機能として、①安全な居場所（安心してゆっくりできる空間）としての機能、②家族が社会資源を知り、社会資源とつながり、家族もまた社会資源となりうる場の機能、③子育ての危機管理の場（子育ての危機状態の予防と早期発見）としての機能、④親の社会観と福祉観を醸成する場としての機能

活動方法：実際の活動方法について述べると、前述の「見守り型」活動であり、上記の役割りと機能を果たしている。特に本活動での『見守り』とは、活動者間の連携をもとに、参加者親子を親子単位で考え、各親子の参加ニーズを把握し、活動場所での親子の様子を見て、その時々親子の必要に応じて対応する。という方法である。更に必要に応じ、保

健センターをはじめとする関係機関や他の子育て支援の場等との連携もとっている。活動後は、アクションリサーチの手法により、活動者間で活動の振り返り、更には、定期的に児童館や活動関係者およびスーパーバイザーを交えた検討会を持ち、客観的活動評価も行い、活動を継続させている。

活動は、東京都内の児童館、神奈川県川崎市のこども文化センターの2ヶ所において、児童館、こども文化センターと協働の形を取り、それぞれ月3回、曜日を設定し、午前中2時間実施している。参加者は継続利用参加親子を含め、平均10～12組であり、うち常に2～3組の新たな参加親子が含まれる。また、保育園入園等での参加親子の入れ替わりも見られる。活動者は、心理、福祉、幼児教育の専門職のほか、地域のボランティアの協力も得ている。ただし、ボランティアの参加時には、事前に研修を実施し、活動方法、留意点に関する理解を求めている。

Ⅲ. 先行研究（調査）から見えた参加者の心理

1. 最近の親の様子

原田調査から見えるもの

原田は1980年生まれを対象にした子育て実態調査（大阪調査）を実施し⁶、その23年後に、兵庫レポートとして再び、同様の実態調査を実施している⁷。その結果、母親が育児に対する関心が高いにもかかわらず、具体的方法がわからないことが明白となっている。また、育児不安を更に増す要因として、①母親が子どもの泣いている理由、望んでいるものがわからない。②母親の具体的な心配事が多く、その心配事が未解決のままになっている。③母親が自分の子どもを産む前に、子どもとの接触経験や育児体験

が不足している。④夫の育児への参加・協力が得られていない。⑤母親が子育てについて話ができる相手が近くにいない。が挙げられている。他に同調査から、①親が子どもを支配しようとする傾向が強くなっている。②子どもへの期待が大きくなっている。③体罰が多用されている現状。も指摘されている。

この調査結果は、親が親としての役割が果たせるような支援の必要性を明白にしている。親も子どもの成長と共に育つものである。親が親になるためには、育児体験が大切であり、その体験が不足しているならば尚更、子育ての仲間が必要となり、そこで、様々な子育て方法、ヒントが充足できると思われる。仲間の実際の子育ての様子には、たくさんのヒントが隠されている。子育て支援は、「子育て」という日常的な営みへの支援といえ、実際の生活の延長線上の支援となる。そこで、活動の有効性が大きな課題となろう。

2. 親の心理状態と子育て支援サービスの活用 中村調査から見えるもの

中村は、全国244ヶ所の流通店舗内の母子保健相談室を訪れた就学前の子どもを育てている親を中心に、子育て意識調査を実施し、その結果以下のことを明らかにしている⁸。

①子育て不安等の否定的な子育て感情が強ければ、社会が用意しているサービスを積極的に活用しないし、サービス利用するために必要な情報収集にも積極的に取り組もうとしない。これに反し、肯定的な子育て感情が強ければ、子育てに関する全ての行動が積極的となり、情報収集もサービス活用も自らの必要に合わせて積極的に取り組み、子育てをエンジョイしようとする。②自己効力感（自分を高めていく、プラスに向けていく）の高い

親は、子育ての満足度も高く、社会サービスの活用や情報収集に積極的である。③地域における子育て支援では、親の心理状態を正確に把握し、否定的な子育て感情の強い親には、その自尊感情を高め、サービス活用や情報収集に積極的に取り組めるように支援する必要がある。そして、その必要性として、親の否定的な心理状態は子どもに対する適切な対応に支障をきたし、子どもの成育にも影響を与える可能性があるとしている。

同時に行った子育て広場の支援者へのフォーカスグループディスカッションの結果から本調査に参加した筆者は活動課題として、①現在の活動の充実とそのための客観的振り返りの必要性。②他機関との連携・協働の必要性。③地域との連携の必要性。を挙げた。そして、特に①においては、グループディスカッションやその後の活動の参与観察から、やはり、活動者による『見守り』の視点を課題とした。その指標となるものがないことも大きな要因となっていると考えた。

IV. 研究方法

1. 研究目的：「見守り型」活動を評価し、更に「見守り型」活動の方法（特に『見守り』の視点）を具体的に提示する。
2. 研究方法：2ヶ所の「みどりのへや」活動をフィールドとして、参与観察により、活動者及び親子の関わりを記述した。観察方法は活動時の活動者の『見守り』方法に観察のポイントを置き、活動者の働きかけと、それによる親子の行動変化、場における会話等を質的に分析した。なお、分析に際しては、活動に参加した活動者の主観的意見だけでなく、活動検討会における多職種による客観的意見も

参考視点として加えた。

3. 対象：「みどりのへや」活動2ヵ所（東京都、神奈川県）の参加親子のうち、子育て支援活動現場で対応方法が話題に挙がる親子であり、継続観察を行ったそれら親子のうち各10組への支援方法を抽出し、支援方法について検討した。
4. 実施期間：2005年4月より2008年3月

V. 結果

ここでは、はじめに20の分析事例の中から、

代表的な2例のかかわり方を挙げ、活動参加の導入部分での『見守り』の有効性を挙げておく。

事例1 母親が気づかない拘束を子どもに強いていると思われる場合

具体的には、遊具での遊び方やおもちゃ片付け等に神経質な母親や子どもを自分の理想とする型にはめようとしている場合等が当てはまる。これはとすると、親子両者のストレスに発展しうる。参加親子の様子と、活動者の『見守り』視点、それによる親子の変化を導入部分に焦点をあて表-1にまとめてみた。(表-1参照)

表-1

参加親子の様子	活動者の『見守り』視点	親子の変化
2歳半の男児をつれて警戒しながらの参加	参加親子の参加ニーズの把握	「何もいわれそうもないから。安心していつものようにできるわ」親子は警戒を解き、通常のかかわりを展開
母親は指示行動が多く、子どもは落ち着かない様子。	親子の様子を見守る。 この様子が頻繁に見られることに着目。母のイライラと、子どもの落ち着きのなさ両方に共感の声掛けを行う。 「ママ大変かな？」 「○○ちゃんはどうしたいのかな？手で遊びたいのかな？」 母親の前で、子どもに声掛けしながら共に遊んで見せる。	エピソード1：レールを敷いている母の隣で、電車ごっこ。母の作ったレールを無視して、畳のへりをレール代わりに電車を走らせる。母「レールがあるでしょう。ここでこうして遊ぶのよ」「あら、電池が入っていないわ、入れなくちゃ。入れたら、自然に走るのだから」と電池を電車に入れる。子どもはそれをまた、取り出して、自分の手で押して遊ぶ。母「違うのよ。これはこうして遊ぶものなのよ」子どもは母が入れてくれた電池を放り出す。母は「だめじゃない。きちんと遊ばなくては」 エピソード2：おもちゃで、自分なりに遊ぼうとする子どもに「ちがうの。これはこうして遊ぶものなのよ。遊べないなら、片付けなさい」と母、まだ子どもが遊んでいる途中のおもちゃを片付け始める
母は、共感されたことで、自分の気持ちを話す。活動者と子どもの遊びの様子を見る。		共感された母「そうなのいつも、言うこと聞かなくて、違うといっても、また同じことするし、私のいうこと聞いているのかどうかかわからない。一体何なのよとすぐイライラしちゃう」 活動者の子どもへのかかわり方を見て、母の意見「こんな遊び方が、あってもいいのね」
	子どもの意志がはっきりしているなら、自我が芽生えている証拠という部分を肯定的に提示し、成長を見守ることは根気があることを、共感的に伝える。	「うちの子、反抗ばかりと思ったけれど、きちんと成長しているんだ。意味があつての行動だったんだ」 「私も、あんな遊び方をさせてみようかな」 ⇒次回から、少しずつではあるが、子どもとのかかわり方に変化が見られ、子どもの気持ちも汲み取ろうとする様子が伺えた。

参加親子の中には、さまざまな子育て支援等の場を経験している場合がある。そして、その話の中からは、教示的や指示的に意見を言われることへの反発が良く聞かれる。結果、反発から子育て支援の場への参加意欲がすぐわれ、閉鎖的な子育てへ発展すること、更には、意見により自己肯定感や自尊心が持たなくなり、自己効力感へのステップが閉ざされることが懸念される。そこで、子育て支援の場では、はじめに、親子の居心地の良い場の提供と、活動者との信頼関係の構築が必要となる。その上で親子が安心して振舞えることから、親子の気づかない課題も見えてくるからである。上記事例がこの例となる。ただし、課題となりうる部分に活動者が気づいたとしても、その課題を明らかにすることが、現在の親子関係にとり良いか悪いかの判断も必要となる。親子の関係を見守り、きちんと把握できなくてはならない。本事例の場合、活動者の懸念は、支配的な母親、共感する能力が少なすぎる母親のかかわりが子どもの意欲をそぎ、自分の意志や自己肯定感の持たない子どもを作り上げることになることにあった。ダニエル・N・スターン「乳児の対人世界」で例にあげられているモリーの母にも類似している⁹。このようなことは往々にしてありうることであり、母親は自分の枠組みを子どもに強いていくこととなっている。本事例では、活動者はそれを十分に視野に入れながら、支配的な母親の気持ちにも共感し、母との信頼関係を得ることから支援を始めた。そして、次の段階で、子どもとのかかわりかたを教示的、指示的ではなく、一つの方法として提案した。特にこの提案方法は、実際の親子関係のモデルを活動者が子どもと遊ぶことを具体的に示すという方法をとった。そ

れにより、母親が自然に、反発を起こさず、その方法に向き合えることで、親子関係に変化が見られるようになった。これは即座に変化するものではなかったが、その後も、親子が活動者との間で構築された信頼関係を基盤に、継続された活動の中で、同様の示唆を行い、親子の力動は変化していった。

事例2 子どもの対応に困っている母親の場合

子どもの落ち着きがなく、保健センターにも行ってみた母親、子どもの様子への気づき方、遊ばせ方、声掛けの仕方等がわからず、子どもとの関係が結ばずに、親子関係にひずみが入りかかっている例であるが、やはり、導入部分のかかわり方を表-2としてまとめてみた。（表-2参照）

自分の子どもといえども、コミュニケーションがとりにくい場合がある。母の思い込みと子どもへの期待等を含む深い思いがあればそれだけ、素直にその状況を把握することは困難となる。また、生まれながらに個性があるとされている子どもとの相性の問題もある。それが2次的な親子関係不適合を生み出すことは想像できる。そこを調整する役割を取れるのが活動者であろう。しかし、ここでも、母の安心感と信頼関係を得るための『見守り』から始める必要がある。親が、そのままの自分を受け入れてもらっている安心感をもてない限り、活動は先には進めないからである。表-2でのかかわり後は、親子の様子を見ながら、親子間の通訳の役割を継続していった。そして、母親が、落ち着いて子どもと向き合えるように、参加者同士の関係にも注意をおいた。母親が他の親子へ必要以上の

表-2

参加親子の様子	活動者の『見守り』視点	親子の変化
2歳の男児をつれて心配そうに参加	参加親子の参加ニーズの把握 母の気持ちを聞き、安心の場であることや、活動者も共にかかわるので、ゆったりとすごしてみることを提案	母親は参加直後に活動者に「子どもが何を考えているかわからないのです。あちこちのこのようなところに行ったのですが、すぐに子どもが言うことを聞かなくて、泣き叫んだり、何がなんだかわからず他の人に迷惑をかけるので」
母親は子どもの行動を先回りし、周りに迷惑を掛けないようにと、禁止の言葉を繰り返す。 また、反面、子どもが禁止されたことにより、泣き叫んだりしないように、先回りの遊具の提示を行う。	親子の様子を見守る。 この様子が頻繁に見られることに着目。母の困惑と、子どもの苛立ちの両者に着目 「ママ大変そう」 「○○ちゃん、～がしたかったのかな。『ママ。僕これがしたいの』っていえるといいね。」「ママ、○○ちゃん、～がしたかったんですって」たとえ、子どもの言葉の発達に追いつかない行為と思えても、言語化することで、子どもはそのニュアンスから、コミュニケーションを学び、母もまた、同時に感じ取ることができる。	振る舞い1：集中して遊具で遊んでいる子どもに他の子どもと共に遊ぶようにと、遊具を奪って、促す。 遊具を奪われた子どもは、パニックになり泣き叫ぶ母は、そんな子どもを抱き上げ、「どうしたの？」 振る舞い2：子どもは、いろいろな遊具を触ることで、その音や肌触りを楽しみながら、遊具を転々としている。それぞれ、異なる音がしたり、肌触りが異なることを楽しんでいる様子が伺える。たまたまひとつの車の遊具を触っていた子どもに、母は「あっ、車に乗りたいのね」といい、抱き上げて乗せた。とたん、子どもはパニックを起し、泣き叫んだ。母は、抱き挙げたが、子どもは母の腕の中で、のけぞって泣き続けた。
母は、共感されたことで、自分の気持ちを素直に、話すことが可能となる。		共感された母「本当に大変なんです。落ち着きがなく感じて、障害があるのではないかと、保健センターへも相談に行ったのですが、大丈夫って言われてでもすごく心配で。どうしていいかわからなくて」
活動者が話す子どもの気持ちや対応方にびっくりの様子	親子間のすれ違いの修正を、親子間の会話を通訳のように提示することで両者にかかわる。	「そうだったんだ。」「黙って、落ち着いて見ていてもよかったんだ」「こうしたほうがよかったのかも」

気兼ねを感じていたからである。周囲との関係で孤立感や居心地の悪さを感じないような環境作りは、「見守り型」活動においては必要不可欠なことである。これにより親子は、母親の当初の心配を感じさせないような安定した関係を持てるまでになった。また、参加者同士のサークルにも参加できるようになっており、「みどりのへや」活動への参加は、親子の必要に応じて、たとえば、子育ての愚痴等を話しながら自分の気持ちの整理の場として、また、情報収集の場として等に使われている。筆者が実施している「見守り型」活動は、

事例1、2のように進められているが、この『見守り』が効果的なものにつながっているかどうか、修正すべきかどうかは、活動者同士の有効なパートナーシップによる。『見守り』が活動者の思いから参加者への押し付けや、参加者にとり、活動の場が居心地の悪い要素となっているかどうかは、客観的視点からの指摘が必要となる。参加者への一連の活動支援が的を得たものであったかどうか、どのように継続すべきかどうかは、活動検討会で検討されることとなる。「見守り型」活動こそ、その的確な役割の継続のために、活動

の振り返りが必要条件となる。

以上の活動報告は活動の一部に過ぎないが、活動における「見守り型」活動の幅広さと有効性が理解されたと思われる。本論中には詳細に紹介できなかったが、他の検討された18例には、子どもとの遊び方がわからない、子どもに話しかけない、子どもに向き合えない、兄弟姉妹のかかわり方がわからない母親への対応や子どもだけでなく仲間作りが苦手な母親への対応、子どもの反抗に手をやいたり、他の子どもと比較したがる母親への対応等がある。表-3としてこれら18例の継続した『見守り』のポイント、それによる親子変化、検討会での検討課題、評価等の一部をまとめておく（表-3参照）。

ただし、参加親子との関係を形成する導入部分は事例1、2と同様に、ニードを把握し、信頼関係の構築を基盤とした『見守り』の方法をとった。また、各親子への対応は、個別のものであり、その時々の子の様子により柔軟に対応しているために、すべてを詳細に記載できていないことを記しておく。この柔軟な個別対応ももちろん的確な『見守り』が必要となる。親子にきちんと向き合うことこそが必要となる。

表-3からもわかるように、各自様々なニードから参加している親子に即した『見守り』は、明らかに親子に居心地の良さを与え、それが親子の自己肯定感、自尊感情の獲得に発展し、安心して自己洞察や親子関係の構築につながり、更に自己効力感を持ち、自由に子育て支援の場を活用できるようになっている。これらも含め、有効な親子の変化を促した『見守り』の効果として以下のことが挙げられた。

1. 『見守り』は個別親子に対する適時適応

な対応を可能とする。

個別対応による参加動機の把握から始まる親子への『見守り』視点は、活動への継続参加へとつながる。参加者を一括りにせず、また、なんら評価もしない活動者の『見守り』の姿勢は、参加者に居心地の良さを与え、解放感を与え、自己開示を可能とする。

2. 継続支援に、親子一体を主体とした『見守り』視点は、共に考える姿勢を作り出し、母親にとり、子育ての孤独感、孤立感の払拭となり、活動の場は安心の場や心の拠り所となりえた。また、活動者が共にその気持ちに添い、その気持ちを汲み取ることで、母親は自己肯定感、自尊感情を持つことが出来、これは自己効力感を導き出すことを可能としている。
3. 活動者が親子に指示、教示するのではなく、親子の状況を見守り、親子の気づきを促すという『見守り』の方法と、親子と並行して活動者が存在する姿勢は、親子の活動者への依存を作らず、自己効力感を更に向上することとなる。
4. 以上により、親子関係は円滑に双方向的に流動する。
5. 「見守り型」活動においては、活動者が検討会等を持ち、活動を主観的、客観的に振り返り、更に活動の裏づけとなる理論を確認しあうことが、活動を更に充実させたものとなりうる。

地域子育て支援拠点事業における「見守り型」活動の役割りについて

表一3 継続見守りした親子

親子の継続課題	継続の際の見守りポイント	親子の変化	検討会での検討課題(更なる課題事項)、対応評価
1 遊ばせ方がわからない親	実際に遊ばせ方を提示	実際の方法を知り、試してみる	具体的方法の提示により、親の理解が進んだ。
2 子どもに話しかけられない親	他の親子の遊びの様子をさりげなく提示	子育てを楽しめるようになった。	親子関係構築に役立った
3 自分の子どもにも目を向けられない親	実際に子どもにはなしかける。	親子の話を聞き、試してみる	親子の信頼関係ができた頃に、必要に応じて支援の根拠を理論などで説明することも必要だった
4 自分の子どももよりによその子ともにかかわる親	親子間の気持ちを言語化して互いに話してみる	親子の関心が向くようになる	子どもへの関心が高まるだけでなく、活動者の存在で自己洞察が可能となった。
5 第2子誕生により第1子への対応に不安を持つ親	母親自身の気持ちに気づいてもらう	親が兄弟関係の構築の必要性を理解	子どもへの成長を見極め、柔軟に対応することで、母親の戸惑いと疲労が解消された。
6 兄弟姉妹への親の対応に極端な違いが見られる場合	第2子とだけ時間を持ってもらうことあり	精神的ゆとりが出てきた	具体的方法の提示により、親の理解が進んだ。
7 人見知りする子どもに困っている親	参加時に起きた兄弟トラブルに具体的な方法を提示してみる	ゆとりと兄弟関係を見られるようになり変化	活動への参加を強制するのではなく、見守ることで親子の安心感が構築され、参加継続へとつながった。
8 他の親とのかかわりをもてない親	母親の語や相談に具体的な方法を提示してみる	親の参加親との交流も円滑に	参加者の様子を見守り、共にいる姿勢をつくることで、信頼関係が構築され、活動参加が継続された。
9 子どもにも手を上げがちな親	親の他の親子への気兼ねの私扶	親の参加親との交流も円滑に	親の行動が習慣化したものである場合、継続した親の気持ちの理解と、孤立化の私扶も必要となる
10 発達障害が疑われる親子	親子の緊張感の解きほぐし	他の参加親との関係がアップ	親への課題となる事象の提示方法と円滑な他機関への紹介方法は常に課題となっている。
11 子どもへの反抗に振り回される親	共に存在する	親子間の緊張感減少	反抗期と理解できても、取まらぬ親の気持ちを傾聴し、共感することで、親の孤立感や自己嫌悪感を私扶できた。
12 どうしても他の子どもと比較したがる親	子どもにも言葉で伝える方法を実際に提示	子育てにゆとりが出てきた	活動者個々の、参加者同士の関係や、気持ちの理解と活動者同士の対応の連携が、参加者のストレスを解消できた
13 情報に振り回されている親	活動者数人の共通認識による継続見守り	子どもへの態度がやさしくなった	振り回されがちな情報の真実を知る必要もある
14 幼稚園入園を嫌がる子どもにこぞする親	必要に応じて、他機関の紹介と支援の継続	情報に振り回されがちなことへの気づき	各親的、冷静な判断が、親の理解を促した。
15 他の親や活動者からの評価を気にする親	親の気持ちの理解	親自身の緊張感への気づき	親の隠れた気持ちと理解し、わかりやすく提示することで、隠れた課題が明白となり、課題解決につながった
16 多機関での診察に悲観的になっている親	正常な子どもの発達を肯定的に提示	親が自分の気持ちを理解	親の自己肯定感を持てるように、見守り、支援したことで、参加者と共に考え、エンパワメントすることで、孤立感が私扶され、真剣に課題に向き合えるようになった
17 障害を持つ子どもとの親	その子の良いところを提示	他機関での診察の冷静な理解が可能に	活動者の存在が親子間の関係を円滑なものとした
18 精神不安を持つ親	情報の理解と活用方法を例を挙げて提示	積極的な課題に向き合えるようになった	活動者の存在が誰でも活用できる開かれた場であることが必要
	親の親子との円滑な関係性構築の手伝い	他の親との交流ができるようになった	親に向き合い、話を傾聴することで、安心の場の確保となり、精神的安定の時間が持てた
	親の気持ちの理解	活動への参加が継続	
	安心の場の提供	親子関係が円滑になった	

VI. 考 察

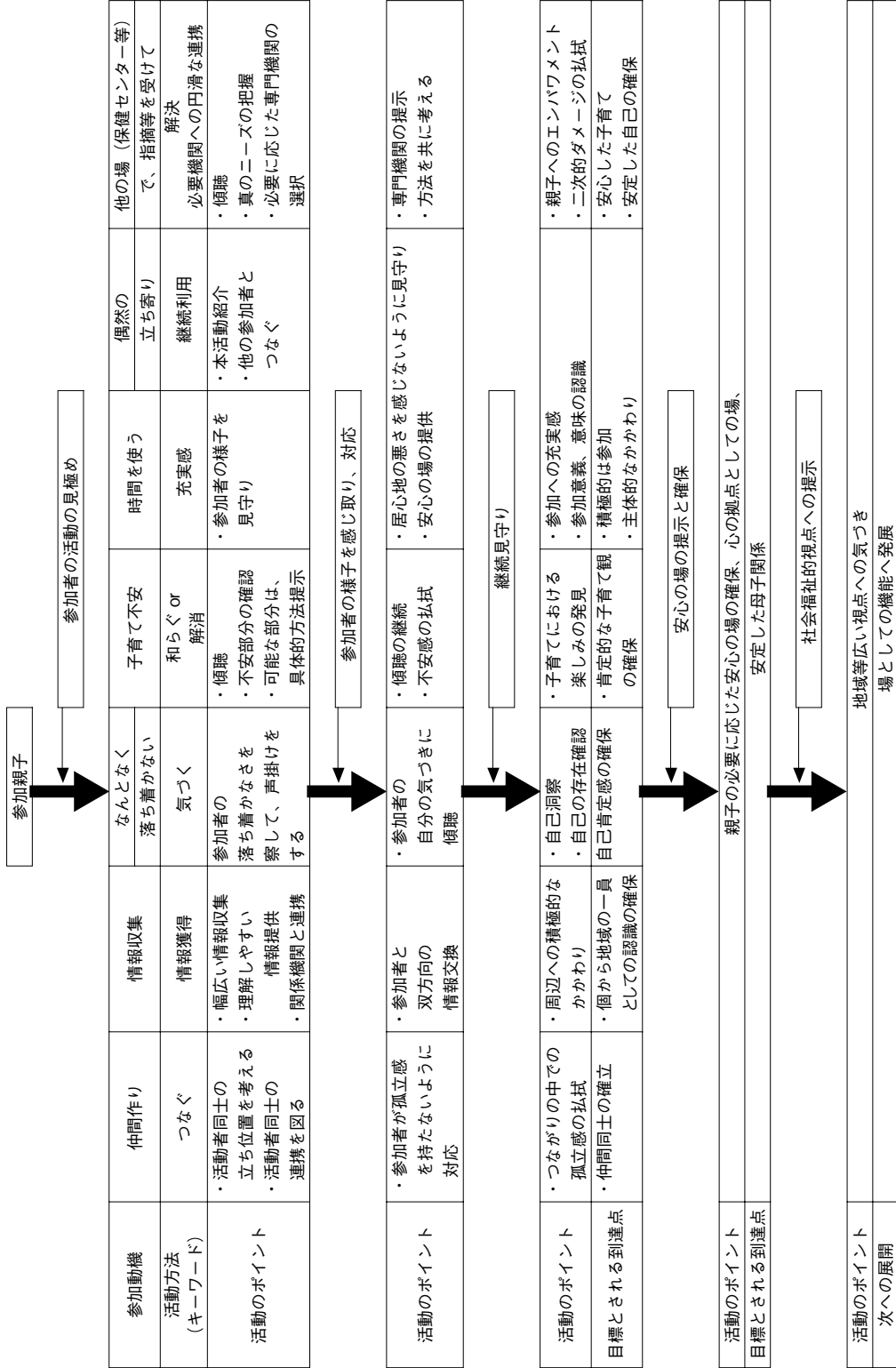
「見守り型」活動の範囲は実に幅広く、活動者の知識と経験、研ぎ澄まされた感覚が必要となる。参加親子にも、活動者にもそれぞれ個性がある。その中で、活動を有効にさせるために、活動者同士の活動における共通認識や、連携、活動の振り返り等が必要となる。本論中では、そのためにも、本活動におけるアクションリサーチの手法による活動検討会が不可欠となるとしたが、これは、活動者が専門家である必要性を示唆するものでは決していない。活動を継続させ、活動を振り返り、更に活動をスキルアップさせる方法をとることで、その専門性は育つと考えられる。その方法が検討会であり、研修会であろう。また、常に活動において、活動指標となるもの、参加者への対応に対して即座に応用可能なソリューションバンクのようなヒント集も必要となろう。

これまで「見守り型」活動の方法を漠然と曖昧にさせていた原因の一つは、具体的提示や客観的活動振り返りがなかったことではないだろうか。これは、行政をはじめとする各機関の企画実施においても言えることだと思われる。漠然とした企画案と方法論を述べて、企画の実施だけを投げかけていたのでは、どのような有意義な企画であっても有効には機能しない。実際の活動者が活動をしっかりと理解でき、活動しながら活動が有効に機能するように振り返り、修正し、また良い部分は更に発展させながら、活動に誇りと自信を持って活動していけることが必要と思われる。

これまでの活動をヒントに、活動の一指標として「見守り型」活動の『見守り』視点を表-4にまとめておく（表-4参照）。

表-4からもわかるように、「見守り型」活動では、参加者の参加動機を知り、そこに適した関わり方が必要となる。ここでの対応は、参加親子との信頼関係の確保のためにも重要なものといえる。動機には、仲間作り、子育てに関する情報を得ようとしての参加、気持ちなんとなく落ち着かない、これにはイライラしたり、なんとなく焦ったり、自己肯定感が得られなかったり等さまざまな場合が考えられる。他には子育てで不安や暇つぶしにも当たる時間を使う、また、偶然の立ち寄り、そして、他の子育て支援の場や保健センター等で何らかの指摘を受けた場合等が考えられる。この場合のキーワードが表のキーワードに当たるものである。そして活動のポイントとしては、仲間同士をつなぐという仲間作りの場合には、活動者同士が連携し、互いの立ち居地を考慮して、参加者同士が孤立感を持たず、居心地が良い空間を作る対応が必要となろう。そして、その対応の継続により、参加者はつながりの中での孤立感を持たず、仲間同士が確立されたものとなるであろう。そうならば、仲間同士の関係は広がり、活動の場も子育て支援の場のみとは限定されなくなる。それにより、子育て支援の場は親子の必要に応じた安心の場となり、親子が主体的に活用できる場となりうる。情報収集を参加目的とする親に対しては、幅広い情報を、親が理解しやすいように情報提供することが重要課題となろう。そのためには、活動者自身が幅広い情報収集に心がけ、また、関係機関等と連携を密にしておく必要がある。この場合、次の段階として、参加者と双方向の情報交換をあげているが、そうすることで、参加者の活動への積極性が助長されると考えられる。それにより、中村の調査からもわかるように、

表-4 「見守り型」活動における「見守り」視点



自己効力感の向上につながると考えられる。次にあげられる「なんとなく落ちつかない」という気持ちは、活動参加時、参加した母親からよく耳にする言葉である。原因は、原田の調査からも中村の調査からも、また様々な論が繰り広げられている現在の母親の心情であろう。母としての自分と、自身としての自分、そしてこうあらねばなら自分と、こうした自分のアンビバレンツな気持ちの狭間での思いから出てきているものとも考えられる。このような場合は、参加者の気持ちを察して声をかけることから始まる。気持ちを汲み取ってくれる人の存在は、次の自分自身の気持ちの理解へと進むこととなる。そしてその気持ちを傾聴してもらうことで、自己洞察が可能となる。こうして自己肯定感が持てるようになると、母子関係も円滑に結べるようになると考えられる。子育て不安は、その不安がはっきりしている場合である。ここでの対応は不安の部分を取り、不安を確認する。そして、可能な部分は不安を解消できるが具体的方法を提示することも必要となろう。この提示の方法は、参加者同士の話し合いへと発展させ、多くの意見を得ることもできるであろうし、専門家を紹介することも可能であろう。前者の場合は、参加者の中で、同様の不安を持っている場合、互いに「自分だけではない」という安心感も得ることとなりうる。これらを継続させることで、不安感は払拭され、子育てにおける楽しみも得ることが可能となろう。こうして肯定的な子育て観も確保できることとなる。この場合、注意しなくてはならないのは、参加者の不安を煽ったり、軽い不安であったものを、大きな不安へと変えてしまう可能性もあることであろう。それを考えると『見守り』には、それを有効にす

るコミュニケーションスキルも必要となることが明白である。暇つぶしや、偶発の立ち寄りという場合、参加者の様子を見守り、居心地のよい、安心できる場の提供が必要となる。活動への参加が参加者にとり、意味のあるものとなれば、継続利用が可能となり、積極的な活動参加へと発展することであろう。最後の他の場、例えば、他の子育て支援の場、保健センター、または医療の場等で何らかの指摘を受けて参加した場合については、多くの留意点がある。ここでは、自分の置かれている活動の範囲を考える必要があろう。活動の役割や機能を確認し、可能な範囲を明白にし、必要機関との連携を考える必要も出てくる。また、専門機関が提示している内容を参加者と確認しながら、安定した子育てができる方法を共に考える必要も出てくる。親子のエンパワメントと2次的なダメージの払拭が活動の主体となると思われる。

このような幅広く、深い視点での『見守り』の先には活動が安心の場となり、親子の心の拠点としての場となることが望まれている。心のよりどころや居場所があることで、安定した母子関係が形成されるからである。全般を通して「見守り型」活動の留意点に、親子の気持ちに添うということが挙げられる。指示するのではなく、教示するのではなく、まして押し付けるのではなく、対等に、並行して活動する姿勢が望まれる。なぜなら、子育て支援の主役は、子育て中の親子であるからである。

そして、参加親子の参加動機を知ったなら、表からもわかるが、それにあった、活動の方法、ポイントが活動の中心となろう。そして、『見守り』は、継続し、活動が親子の中で、安定した存在となり、日常の生活の延長線上

に確立したならば、今度は、親子が主体性を持って、地域に羽ばたくエンパワメントをすることになる。まさしく子育て支援は、親を子どもと見立てた、子育てともいえる。何時までも、依存させていたのでは、親としての成長はありえないと思われる。しかし、子育て支援の拠点が安心の場であり、新たな不安や、必要となる場合には活用できる安心の場であり続ける必要もあると思われる。筆者は活動を行っている「みどりのへや」の機能と役割として先に(1)(2)を挙げている。(1)はより個別的な心理的側面であり、(2)はそれから発展する福祉的視点といえる。もちろん両者とも必要な視点ではあるが、やはり(1)が確立して、初めて(2)への移行が可能となる。そして、(1)に関しては、特にきめ細かい『見守り』視点が(2)に関してはエンパワメントの姿勢が必要となる。

Ⅶ. 結 論

- 1) 子育て支援拠点事業における「見守り型」活動は各親子に即した支援を可能とする。
- 2) 継続的「見守り型」活動の展開は課題を抱えた親子の課題解決を可能にし、更に親子間の関係修復も可能とする。
- 3) 「見守り型」活動を有効に展開するには具体的なモデルともいえる指標が必要となる。
- 4) 上記指標の一つに表-4が相当する。

Ⅷ. 終わりに～今後の研究課題

活動を実際に継続実施して感じることは、実際の場で、現場に即した支援方法を、活動者が理解しやすいように提示することの必要性である。今後は、このことを基本に置き、研修、実践等においての具体的提示方法を検

討し、実際の効果を検証していくつもりである。そして子育て支援における「見守り型」活動の成果等を更に明白にし、活動の導入に位置付けていきたいと考えている。現在それを行いながら、活動の方法論としてのヒント集も作成中である。

最後に、「みどりのへや」活動の場を提供下さり、活動を協働して下さっている都内児童館、川崎市こども文化センターの職員の方々、常に活動を共に行い、的確なサポートを下さっているNPO法人生活福祉ファクトリーの尾崎陽子さん、検討会等活動を共に検討し、スーパーバイズ下さっている、同NPO代表であり人間学博士の吉田真理さん、心理カウンセラーの濱田はるみさん、吉野操子さんに深く感謝致します。

注

- 1 「児童館等地域子育て支援の場における専門職（カウンセラー、ソーシャルワーカー等）の活動方法とその効果に関する調査研究」主任研究者吉田真理 平成18年2月財団法人こども未来財団
- 2 「地域子育て支援活動者養成テキスト」主任研究者吉田真理 平成19年2月財団法人こども未来財団
- 3 「地域における子育て支援サービスの有効活用に関する研究～サービス利用に関係する親の心理要因とサービス利用の積極性について～」主任研究者中村敬 平成20年2月財団法人こども未来財団
- 4 「ドルトの精神分析入門」竹内健児 誠信書房 2004 pp234-pp241
- 5 「児童館等地域子育て支援の場における専門職（カウンセラー、ソーシャルワーカー等）の活動方法とその効果に関する調査研究」主任研究者吉田真理 平成18年2月財団法人こども未来財団 pp46-pp54
- 6 「乳幼児の心身発達と環境-『大阪レポート』

- と精神医学的視点」服部祥子、原田正文 名古屋
大学出版会 1991
- 7 「変わる親子、変わる子育て－『大阪レポート』
から23年後の子育て実態調査より－」臨床心理学
第4巻第5号 原田正文 2004 pp586－pp590
- 8 「地域における子育て支援サービスの有効活用に
関する研究～サービス利用に関係する親の心理要
因とサービス利用の積極性について～」主任研究
者中村敬 平成20年2月財団法人こども未来財団
- 9 「乳児の対人世界」臨床編 ダニエル・N・ス
ターン著 小此木啓吾・丸田俊彦監訳 神庭靖子・
神庭重信訳 岩崎学術出版社 2003年 6刷